執筆の手引き―『学校音楽教育実践論集』（大会関連）―

◆提出するもの

≪メール添付で提出するもの≫

1. 原稿(文書)の、「Word」または「一太郎」および「PDF」の電子データ（可能な限り図表、写真、楽譜等も文書内に挿入する。挿入が不可能な場合は、比率に注意して本文中にその分のスペースをとり、挿入の指示を明記する)。

≪幹事からの電子データ「受領」メール受け取り後に郵送するもの≫

2. 1の電子データの各ページA4判でプリントアウトし、それらをB5版に縮小コピーしたもの1部。
3. 「個人研究」の場合は、チェックリストの全項目を確認の上、全ての項目に「✔」を入れたもの。
4. 図表、写真、楽譜等が手書きの場合はその原図（比率に注意して、大きく鮮明なもの)。

◆書式

1. **学会ホームページの書式を用い、それに上書きをしてください。**別に書いたものを書式に貼りつける時は、**「書式を結合」を選択**して下さい。「元の書式を保持」にすると崩れる場合があります。
2. ・「はじめに」はA4版で、23字×43行の1段組、1ページで書く。
   ・「はじめに」以外は、A4版で、23字×43行の2段組（図表・注などを含む）で書く。
   ・「個人研究」は、2ページ（図表、注などを含む）とする。
   ・「フォーラム報告」は、1ページ（図表、注などを含む）とする。
   ・上記以外のページ数は、編集委員会が指定する。
3. 本文のフォントは、原則として「MS明朝」を使用し（「MSP明朝」は使用しない)、本文中の英数字は注も含めて全て半角（フォントはCentury）とする。
4. 図、写真、楽譜等は、それらの下に番号とタイトル(**図1　…**)、表は、表の上に番号とタイトル(**表1…**)を明示する。番号とタイトルのフォントは「MSゴシック」とし、センタリングする。
5. 注は論文の最後に、引用の順に列記する(自動脚注は使わない)。参考文献は、論文の最後に(注がある場合は、注の後に)列記し、2行目以降は頭位置を1字下げる。
   注及び参考文献のどちらも、フォントポイントは9にし、行間は本文と同じにし、狭めない。
   - 雑誌の場合：著者名(発行年)「表題」『雑誌名／紀要名』発行者名，巻号，ページ
   - 単行本の場合：著者名(発行年)『書名』発行所，ページ
   - 辞典・事典の場合：責任執筆者名(発行年)「表題」編纂者『辞典・事典名』発行所，ページ

《注の書き方の例》

1) 大阪花子(1998)「音楽教育の方法」『学校音楽教育研究』日本学校音楽教育実践学会，第5巻, pp. 22-26
2) 大阪太郎(2000)『日本の音楽教育』大阪堂, p. 13
3) 音楽花子(2018)「音楽教育の歴史」音太郎編『音楽事典』大阪出版, p. 100
4) Taylor, W. (1998) *The Music*, Oxford University Press.
5) Reime, G. H. (2001) 'Study of Music'. In Jackson, P. (ed), *Handbook of Education*,Macmillan, pp. 400-450

＊本文中の注番号は、該当箇所の語句の右肩に[1] [2]のようにつける。
［例］　…として位置付けられていることが多い[1]。△△は次のように述べている。「○○○○○」[2]。

《参考文献の書き方の例》

大阪花子(1998)「学校音楽教育における実践的アプローチの意義」『学校音楽教育実践論集』日本学校音楽教育実践学会，第1号, pp. 32-33
Reime, G. H. (2001) 'Study of Music'. In Jackson, P. (ed), *Handbook of Education*, Macmillan, pp. 400-450
※ 注及び参考文献の書き方は、必ず、この例を参照して書いてください。

◆その他

1. 文章中の表記の統一を図ること。
   例)子ども、こと（事）など。
2. 個人情報の扱いに注意を払い、文中の人名等、特定されないように配慮すること。また、収録物（楽譜、写真等）の著作権使用については所定の手続きをとること。
3. 「個人研究」において「目的」「結果」「方法」は、要点的に簡潔に書き、各々10行程度で書くこと。
4. できあがりは B5 版になるので、図表、写真、楽譜等も挿入した完成原稿をプリントアウトし、B5に縮小コピーをした上で、図表等が見えにくくならないかどうかを必ず確認した上で提出すること。